様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 1 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：２０１１～２０１２
課題番号：２３７２０３０３
研究課題名（和文）　多文化対話活動における日本人英語学習者の語用論的能力発達過程の解明とその応用
研究課題名（英文）　Pragmatic development of Japanese learners of English through Multicultural Interactions
研究代表者
シーゲル　亜紀（SIEGEL AKI）
立教大学・異文化コミュニケーション学部・助教
研究者番号：５０４５４９６３

研究成果の概要（和文）：
本研究は、日本人学習者の多文化対話活動における相互行為と語用論的能力の発達過程を解明する事を目標とした。そのため、日本人学生と外国人留学生間における大学寮における多文化英語コミュニケーション・コーパスを作成し、会話分析を使用して分析を行った。その結果、英語能力向上には授業外における対話活動を「言語学習機会」として能動的に取り組むことが必要であることがわかった。また、word search sequence の発達、さらにはアイデンティティの向上もみられた。

研究成果の概要（英文）：
This study aimed to elucidate the process of pragmatic development of Japanese learners of English in multicultural interaction. I therefore created a corpus of multi-cultural English interactions in college dormitories between Japanese students and foreign exchange students in Japan. The data was then analyzed using Conversation Analysis. Results showed that learners need to participate in the multicultural interaction outside the classroom proactively as “language learning opportunities” in order for language development to occur. In addition, development in word search sequences and in participant’s identity were identified.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,200,000	360,000	1,560,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・外国語教育
キーワード：英語学習・会話分析・多文化コミュニケーション

１．研究開始当初の背景

コミュニケーションが成立するには、文法能力(文法、語彙、発音などの知識)のみではなく、語用論的能力が重要である。また、語用論的能力は語彙や文法と異なり、英語を外国語とする(EFL)環境では習得が難しく、海外留学など英語が主に使われている環境においては習得されやすいとされている(Cohen & Shively, 2007)。そしてこのような性質をもつ語用論的能力の習得はEFL環境で学ぶ日本人学習者にとって特に難しいとされてきた。一方で、国際化が進むにつれ、英語はますま

す重要なコミュニケーション・ツールになってきており(Thomas, 1996)、英語使用の機会も英語を母語とするいわゆる「ネイティブスピーカー」とではなく、第二言語話者同士で使用されることが多くなってきている(Alptekin, 2002)。さらに、留学生三十万人計画(G30)により日本国内で大学をはじめとする様々な場面で留学生や外国人教員と英語で交流する機会がますます増えてくる。しかし、このような環境においてどれだけ英語力が伸びるかの検証はまだ進んでいない。そのため本研究では、多文化 EFL 環境における日本人英語学習者の語用論的能力発達について長期的かつミクロ社会科学的視点より分析・検証を行う。

２．研究の目的

本研究は、日本人英語学習者の語用論的能力の発達過程をミクロかつ長期的視点より解明することを目的とする。特に、多文化 EFL 対話活動の相互行為を通した発達過程の実態を日本人学生と留学生による大学教室外で行う自然な英会話を録画し、会話分析の使用によって明らかにする。

３．研究の方法

本研究では研究方法としてまずは大学キャンパス内で最も留学生との交流時間が多いと想定される学生寮で留学生と共同で生活するシェアルームに暮らす日本人英語学習者に焦点を当て、4 名の日本人学生と留学生間の会話を月 2 回、毎回 30 分程度、1 年間に渡り会話の録画を行った。また、その最終録画から 1 年後にも追加で録画を行った。これら録画した会話は Jefferson(1985, 2004)に従い文字化し、分析用データを作成した。そして、会話分析(Sacks et al., 1974)の使用によって分析を行った。その結果、約 40 時間分の多文化英語コミュニケーション・コーパスを作成した。また、TOEFL のスコア、日記、インタビューのデータも収集し、多角的に分析した。特に今回は多くの学習機会が観察されるといわれている word search sequence(言葉探しシークエンス)(Goodwin, 1983)に焦点をあて、分析を行った。

４．研究成果

分析の結果、大きく３つの事が明らかになった。

(1)まず、多文化環境が及ぼす英語能力への影響を考察した結果、英語能力向上には授業外における多文化対話活動を「言語学習機会」として能動的に取り組むことが必要であることが分かった。

日本人学生の TOEFL の結果は入学当初の 4 月と年度末の 1 月の間に平均して 47 ポイントの大きな伸びがみられた。これは、多文化環境が効果的な言語学習環境であるとする可能性がある。しかし、個々の日本人学生のスコアを詳しくみると多様であり、特に Ami(仮名)と Tomoko(仮名)の 2 名のスコアは対照的であった。Ami は、約 100 ポイントの大きな伸びがあった一方で Tomoko の総合スコアは殆ど変化がなく、逆にリスニングスコアが減少していた。インタビューや日記などのデータからは、学習意欲、学習時間、留学生との交流時間などほとんど差が認められなかった。しかし、会話分析を使用して、彼女らの録画会話を分析することにより違いが明らかになってきた。

下記抜粋 1 でみられるように、Ami はこのような word search sequence を言語学習の機会として捉え、会話に参加する態度が多々み

られた。Ami は Initiation Response Feedback（開始・反応・フィードバック）(Sinclair & Coulthard, 1975) の会話パターンを活用し、分からない単語を積極的に会話相手の Hang(仮名)より引き出し、繰り返し発話していた（行 545-549)。このように会話の本題よりそれた word search sequence を Ami は言語学習機会として捉え、意識的に行っている行動であると彼女のインタビューの中で言及している。彼女のインタビュー、日記、録画会話などから Ami は交流を通して留学生の国の文化についても学習していたと言えるが、言語学習に比べると、それほど重要視していなかったと考えられる。

抜粋 1

544	Ami:	Yeah (.) very che:ap(1.0)a::nd (.) da mmh:::
545 →		°how to say°nigiyaka >°mm°<=
546→	Hang:	=AH:: LIVELY (.) lively
547→	Ami:	YEAH lively↑
548→	Hang:	mmh:
549→	Ami:	yeah it's very lively
550	Hang:	ah:::

これとは対照的に、Tomoko は word search sequence を「学習機会」として捉えるより「恥」として捉えている行動がみられた。抜粋 2 は抜粋 1 と同じような word search sequence であるが、Tomoko は早口での修正を繰り返し、笑い、そして話し相手の Pham(仮名)との重複発話（行 111-112、114）により恥ずかしさや能力の欠如の隠匿（Wilkinson, 2007）とみられる行動をとっていた。

抜粋 2

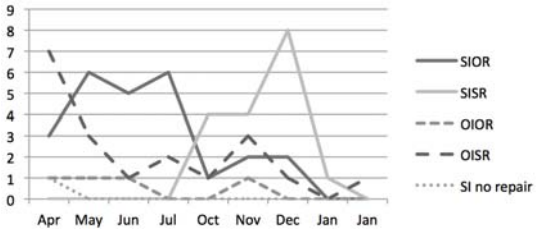
108	Tomoko:	an ai ha:ve (2.2) AH:ah ((clap)) (1.0)
109		the intransi(.)i'o:f (.)eei pee(.)°yuu°?=
110→	Pham:	=$ohohoho an introduction [of eei pee yoo:(.)right?$
111→	Tomoko:	[>$introduction↓(.) sorry
112		introduction$<
113→	Pham:	.hhh [$oh ai see$
114→	Tomoko:	[>$ya: introduction of$< (.) DAT was (.) prii:
115		(.) good

最初の 2 ヶ月間は Ami と同様、会話を「言語学習機会」として捉える行動をしていたが、それ以降はそのような行動はみられなかった。インタビューの中で Tomoko は他国の文化について外国人留学生との交流から多く学び、寮のメンバーは「家族のようになった」と説明していたが、英語学習についての言及は殆どなかった。

Batstone（2002）は会話を「コミュニケーション」と「学習」の二つのコンテキストに分けられるとしている。このフレームワークを適用すると、Tomoko は留学生との多文化交流を「コミュニケーション」に焦点をあてている一方で、Ami は「言語学習」として捉えていると言える。多文化 EFL 環境は学習者の言語能力を育成するための可能性と機会を持っているが、学習者が言語学習環境として積極的に活用し、自らの言語能力を向上させるために意識的にそれを利用する必要があることがわかった。また、インタビューでは実際の行動は把握できず、本研究は実際の会話を収集・分析する意義を示しているといえる。

(2)次に、「依頼」などの発話行為に関しては、同級生同士の会話が殆どであったため使用の変化がみられなかったが、語用論的言語使用の一種と言える word search sequence の使用の種類の変化がみられた。Word search sequence とは Goodwin(1983)によると、言葉を探す際に使用する「修正(repair)」の一種である。これらは自他のどちらがはじめるか、自他のどちらが修正をするかの組み合わせで大きく 4 種類に分けられる。

図１



例として、図１はAmiのword search sequenceの種類の変化をグラフ化したものである。初回の録画の時は他者が問題を取り上げ、自ら修正していることが多かったが(other-initiated self-repair)、次第に自ら問題を取り上げ他者が修正する(self-initiated other-repair)ことが増えた。夏期休暇後は自ら問題を取り上げ自ら修正する(self-initiated self-repair)種類が増え、最後はword search自体が少なくなるという変化がみられた。

Self-initiated self-repairはネイティブ・スピーカーも一般的に行っている行為であり、第二言語学習者が成長するにつれてword search sequenceのself-repairが増えるこの現象はHellermann(2009)とも一致している。しかし、Hellermann(2009)はこのような詳細な分析と統計化は行っておらず、より変化の流れが明らかになったといえる。また、次の(3)において書いてあるように、この語用の変化は日本人学習者の自信・英語使用者としてのアイデンティティの変化と関連していると考えられる。

(3)最後に、対話活動の会話分析により、英単語や他国の文化などに対する学習・理解がみられたのみでなく、英語使用者としてのアイデンティティの変化・向上がみられた。

Heritage(2012)によると、知識は常に会話の参加者の中で会話の中で監視されている。誰が何を知っているか互いに把握することにより、会話の内容を選んだり、どの程度詳しく話すかなどが分かってきたりするからである。さらに、これら知識への権利の主張などにより、参加者のアイデンティティが明らかになるとされている(Raymond & Heritage, 2005)。これを応用し、日本人英語学習者がword search sequenceの中でどのように英語の知識への権利の主張が変化していくかの分析を行った。例えば、録画を始めた最初の３ヶ月間は、Amiはword search sequenceを自ら始め、会話相手のHangによるother repairに頼っており、その修正が正確でない場合も鵜呑みにしていることが多かった（抜粋3)。このような行動より、AmiはHangをより英語能力が高い者としてポジショニングしているといえる。

抜粋３

```
1060      Hang:  salty:? (.) e::n if you like (.)you can add
1061             vinegar:
1062  →   Ami:   (.) vine[gar? tte
1063  →   Hang:          [° vinegar°  vi (.)>mirin<
1064  →   Ami:   (0.4)ah mirin hahah[ahah
1065      Hang:                     [hehehe
```

しかし、次第にその関係の変化がみられるようになった。そして11月にはAmiがHangを修正するという行動がみられるようになってきた。以下の抜粋４のword search sequenceにおいて、AmiはHangを英語知識がないと位置づけ、修正をしたが、Hangは問題は英単語ではく、内容であったと訂正をする様子がみられる。

抜粋４

```
504       Ami:   sunpiccolo the::y er:: (.) they focus on the
505              philip↑pine
506   →   Hang:  (0.6) philippine? ((head shake sideways))
507   →   Ami:   hmm: (.)philippine↓(.) you know philippine?
508   →          philippine [a country name
509   →   Hang:             [↑AH:::  (.)  I
510       Ami:   mh
511   →   Hang:  i know °philippine° (.)i donno: the cir↑cle
512       Ami:   ah:: okay
```

AmiはHangをより多くの英語の知識を持っている者という会話内での位置づけを次第に変化させ、自らを Hang より知識を多く持っている者という位置づけにしていったことがわかる。これにより、相互行為を通して Ami のアイデンティティが「英語学習者」からより自信のある「英語使用者」へと向上していったということができる。

このように、多文化 EFL 環境における相互行為の分析を通して、日本人英語学習者の語用、特に word search sequence の発達過程、多文化 EFL 環境の活用方法の重要性、および学習者のアイデンティティの成長過程を明らかにすることができた。また、これら成果についてまだ執筆中のものもある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①Siegel, A. (2013). Utilizing the Hybrid Intercultural Language Learning Environment. Proceedings of the 45th Annual Meeting of the British Association for Applied Linguistic, Vol.45. （査読有、ページ未定）

〔学会発表〕（計４件）

①Siegel, A. (2013). Social epistemics for analyzing development of language learner identity. American Association for Applied Linguistics (AAAL) 2013 Conference, Dallas USA, March 18.

②Siegel, A. (2012). Hybrid Intercultural Language Learning Environment. JALT 2012 38th Annual International Conference, Hamamatsu Japan, October 14.

③Siegel, A. (2012). Utilization of a Hybrid Intercultural Language Learning Environment. British Association for Applied Linguistics (BAAL), Southampton UK, September 6.

④Siegel, A. (2011). Collaborative Language Learning Through Multicultural Interactions. 9th ASIA TEFL International Conference 2011, Seoul Korea, July 29.

〔その他〕

ホームページ等

http://www2.rikkyo.ac.jp/web/siegel/HTML/kaken2011.html

６．研究組織

(1)研究代表者

シーゲル　亜紀（SIEGEL AKI）
立教大学・異文化コミュニケーション学部・助教
研究者番号：５０４５４９６３